

現代社会の学

柏 岡 富 英

もう何回も言い散らしてきたとおり、「現代社会学部」は「現代の社会学」ではなく「現代社会の学」をめざして構想された。「学」を自称するほどの明確な対象と方法と体系をもっているのではないことは正直に認めておくべきだろう。おそらく、現代社会にとって最大の難問は、学問分野によって時間の前後を含みながら、おおむね前世紀末から今世紀初めに確立された知の体系と、現在のわれわれが目ざす「現実」とが大きな齟齬をきたしていることである。しかも知の体系内部における齟齬と、現実そのものにおける齟齬も、知と現実の齟齬と同じように大きい。

そういう状況の中で政治経済学が何を指すべきかを論じたのが、村上泰亮氏の絶筆『反古典の政治経済学』であった¹⁾。村上氏は、「進歩史観の黄昏」という副題を冠したこの大著で、産業化、ナショナリズム、および経済的自由と平等という三つの問題軸を設定し、そこからさらに具体的ないくつかのジレンマを導き出す。正義と平和のジレンマ、行動の自由と秩序との間のジレンマ、経済的行動の自由と市場秩序のジレンマ、技術革新の恒常化にともなう開発主義のジレンマなどである。

こういったジレンマは、近年になって新たに生じたのではない。しかしジレンマ状況そのものは実在していたのに、それがジレンマと感じられなかったのは「啓蒙主義的な『人類進歩』の理念…つまり…アダム・スミス以来の収束モデルの力である²⁾。」しかし今や、このモデルの欠陥を示す兆候があまりにも多くあらわれてきた。この古いモデルを清算して、さまざまな正義の競争、さまざまな進歩の観念の競争、総じて思想の争いに対して十分な場をあたえるような、新しいモデルを模索せねばならない。現代社会の病弊を癒す処方箋として、あたかも万能薬でもあるかのごとくに「共生」を唱える人がいるが、それは思考の放棄に他ならない。「共生」が望ましいことに違いはなかろうが、それはあくまで結果である。では人類が共生にたどりつくため(もし、そんなことがあるとして)の基本条件は何か。それは「理解」であると村上氏は説く。

人間は同質である、あるいは同質であるべきである、という主張はある意味で危険である。…人間は、あるいは社会はそれぞれに異なっているが、そこには「共約可能な」なものがある、という見方が出発点となるべきだろう。自由主義的な社会を存続させるための鍵は、相対主義でない相互寛容、性格の共有ではない共約可能性、そしてそれに基づくルールの形成でなければならない。これが、われわれの一貫して議論してきた「理解」ということの内容である³⁾。

この本を読んだのは、現代社会学部の構想に着手するはるか以前であった。村上氏の訃報の直後、

氏の親友であったS.N. アイゼンシュタット博士が、この本に何が書いてあったのか、筆者に尋ねられたことがある⁴⁾。私にはうまく答えられなかった。正直言って、何が書いてあるのかよく分からなかったのである。しかしつい最近読み返してみて、よくは分からないままに受け取っていたメッセージが、おそらくは醸成され単純化されて、少なくとも「野望」という姿で現代社会学部の構想の中に組み込まれていることを発見して心底驚いた。

まず第一に、「超領域」という考えである。村上氏の本の題名がなぜ「政治経済学」でなければならなかったのか、今さら確かめる術もない。ただ、「政治」を冠することによって経済学という狭いディシプリン、あるいは近代の呪縛を脱しようと試みておられたことは確かだろう。政治学についてもまた同じ。そのことは参照文献の広がりからも明らかである。この政治経済学は、政治学も経済学もはるかに越えた社会の一般理論、あるいは少なくとも既存学問領域の再編成を指し示している。これを大げさにも「現代社会学」という雲をつかむような名で呼ぶことに、村上氏は苦笑いしながらでも賛成してくださるだろうか。しかも現代社会学部は、その必須の柱として自然科学をも包摂しているのである。

第二に、現代社会学は、村上氏の言う「理解」を地盤とする他はない。それは「心の教育」などという甘っちょろい問題ではない。近年喧伝されているこのスローガンはいかにも内容空虚、いやむしる思考停止のための言いわけに過ぎぬ。「理解」は大変な知的鍛錬をわれわれに要求するはずである。この鍛錬を、たとえば「心の教育」などというおためごかしの陰に隠れて怠ったとたん、政治的ファンダメンタリズムにかぎらず、知的あるいは宗教的ファンダメンタリズムは、われわれの内と外から襲いかかってくるにちがいない。

超領域と理解は、二つながらにさても難しい。あえて言うならば、筆者は村上氏の大著ですら、その処方箋を書くことに成功したとは考えていない。しかし、およそ現代社会学を構築するうえで考慮せねばならぬほどのことはすべて網羅されていると言えるのではないか。それを統合して一つの体系にまで仕立てるのは、村上氏ほどの巨人をもってしても、一個人をもってかなうような所業ではないのかもしれない。一人で無理なら、よってたかって…。それはそれで別の困難が待ち受けているにせよ、筆者は現代社会学部をもって一つのカレッジとなすべしと考えている。一人一人の研究者が立派な成果を上げねばならぬのは当たり前で、むしろカレッジとして何を生み出すかが問われるのである。

共生と同じように、おそらくは現代社会学も結果なのであろう。ここに集められた論考から、現時点で一本の糸を紡ぎ出すなど望むべくもない。『現代社会学研究』が新しいカレッジの試金石であり続けるためには、正義についても法則についても、ファンダメンタリズムの甘いささやきを拒否する自制と、領域を越える志を失わないことが最低の条件であると考えている。

注)

1) 村上泰亮『反古典の政治経済学(上下)』(中央公論社、1992)。

2) 同書、上、p. 535.

3) 同書、上、pp. 507-508.

4) このときの様子については別の箇所ですいた。柏岡富英『様々な時の流れ』について、『日文研』、No. 17, 1997.